

# ホームレスの存在 薄れる記憶

## いつらくて避難所から離れる ■ 炊き出しに協力する人も

午後2時46分  
**あのとき**  
これから

多くの日常を奪った東日本大震災は、家を失った被災者とホームレスとの境があいまいになる瞬間でもあった。だが平穏が戻るにつれ、再び「見えにくい存在」に。記録に残りにくいホームレスの被災経験をどう次につなげるか。支援団体の模索が続く。

### 仙台

JR仙台駅(仙台市青葉区)そばのアーケード入り口にある交差点。高橋さん(70代男性、仮名)は、ホームレス支援を目的に創刊された雑誌「ビッグイシュー」販売の手を休め、キャンプ用のいすに腰を下ろした。たばこに火をつけた瞬間だった。あまりの大きな揺れに、めまいかと思った。

ビルから出てきた人たちは、落下物避けようと道路の真ん中に集まった。高橋さんはその輪に加わらず、歩道で揺れが収まるのを待った。「もう雑誌は売れないな」。自転車を押し、散乱するガラスの破片や路面のひび割れを避けながら、約2分離れた雑木林に向かった。

「ガラスが落ちて危ないからこっちは来なさい!」2011年3月11日、市内を襲ったのは最大震度6。屋根にブルーシートをかぶせた自作の掘っ立て小屋では、買い集めた小説など

約200冊が散乱していた。広さ2畳ほど。寝泊まりには困らなかつたが、食べ物に窮した。物流が途絶え、いつも買っていたカップ麺などがスーパーから消えた。食料品店を巡る日々が始まった。

市内では水道や電気が止まった。小中高など288カ所が避難所になり、最大10万人超が避難した。駅の利用者など市内外の人を身寄せる中に、ホームレスもいた。

1週間ほど経ち、市が避難者から住所や名前を聞き取って台帳を整理し始めると、その場を離れる人が出てきた。市は当時から「避難所に入るのに住民票の有無は関係ない」との立場だったが、ホームレスであることが分かり、周囲から自立しようになつたのだ。

「いつらくなつて出てき



仙台夜まわりグループ提供 3月26日  
公堂で行われた炊き出し。元々はホームレス向けだったが、この時は被災者も含め200人以上が訪れたという



バス停前の歩道に落ちた百貨店の壁 3月11日  
JR仙台駅前避難する人たち 3月11日

## 「確かにいたのに、いないことに」被災経験の継承を模索



東日本大震災の津波で海辺の施設が流失した仙台港中央公園。かつてホームレスが寝泊まりしていたという=2011年6月1日、仙台市宮城野区港2丁目、同市提供

た」。ホームレスを支援するNPO「仙台夜まわりグループ」の元には、そう打ち明ける人が少なくとも10人はいた。避難所を離れたホームレスたちは「もういもうもんだよ」「ホームレスだからしょうがない」と口をそろえたという。

高橋さんはホームレス仲間から避難所があると知らされても、足を向けなかった。「行くとも思わなかった」とだけ言い、多くは語らない。

向かったのは、支援団体「萌友」の事務所(同区)。代表だった芳賀ヒロ子さん(81)は被災者のための炊き出しをする合間に、高橋さんがスタップ5人にコロナを渡したのを覚えている。「私たちが何も食べられないと思つたんじゃないか」



高橋さんのように、ホームレスの経験が継承されていない



新田貴之さん

仙台港に面した「仙台港中央公園」。海側では約500人が避難していた。震災から2週間後、青木さんが水の引いた公園に向かうと、テントなどは流失。全員の名前は今も分らない。

元警備員は人だかりの誘導。配膳を手伝い、車の修理をする人も。「いつも助けてもらっているから」と打ち明けることもあった。

炊き出しを手伝ったこと。復興や除染の作業で全国から集められ、劣悪な環境で働かされたこと。そこから逃げだし、またホームレスになったこと。

青木さんは「確かにいたのに、いないことにされる。1人の被災者としても認められていない」。

(宮川七)